

The English Department Newsletter

関東学院大学 国際文化学部 英語文化学科ゼミナール連合通信 第10号 ● 2022年1月20日発行

CONTENTS

- ①冒頭挨拶 / マリオン・イングラムさん特別講演会
- ②就活体験談
- ③Let's Go to English Camp!
- ④ありがとう! 安藤先生!!
- ⑤オーストラリア留学体験! / アイルランド留学たより
- ⑥教育実習を終えて / ゼミナール紹介(1)
- ⑦英語指導者を目指そう! 教育実習座談会 / ゼミナール紹介(2)
- ⑧ただいま卒論執筆中! / 英語文化学科からのお知らせ (TOEIC-IPテスト / 卒業論文発表会 / 英語俳句コンテスト応募御礼 / ピーター・バラカン客員教授特別講演会) / Vista

「ゼミナール通信」冒頭挨拶

英語文化学科長 入江 識元

『英語文化学科ゼミナール通信』の今号は、コロナ禍での2回目の刊行になります。昨年度の第9号は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を最初に受けた年度でしたので、誌面の編集スケジュールも構成も異例尽くめでした。今回と同様、海外留学や学生生活が制限されていたため、コロナ禍だからこそ読者がもっとも知りたいと思っている内容を……というアイデアがゼミ連有志からあがり、見開き2面にわたりコロナ特集記事が組まれました。そこでは4年生のコロナ禍での苦労があらわに語られましたが、学生の文章を読んで見えてきたのは、オンラインでの就活の難しさのみならず、自らの平常心を保つことの難しさであり実生活での困難な状況でした。しかしながら、こうした困難な状況は、ひとりで抱え込むものではなく、コミュニケーションを通して仲間や先輩、後輩と共有するものであり、そうすることで発信者自身の気持ちも和らぐと同時に、それがメンバー共有の資産になるのではないかと考えます。そしてその共有の場こそがゼミナールであり、ゼミナール連合会なのです。ゼミナールは、全国のほぼすべての大学で行われている教育の要であり主体的な学習の根幹をなすものですから、ゼミナール活動が正常に機能しないことは、修得単位以上の大学教育の価値の多くを失うといっても過言ではありません。

大学生活の4年間は、皆さんのこれからの就業人生40年の凝縮です。この4年間のなかでやってみたいなと思っただけ、明日やろう、来週やろうと先延ばしにした結果やらずに終わったことは、おそらくその先の40年間でやらないだろうということです。コロナ禍だから、キャンパスに来られないからといって、進んで自ら何かをつかみ取ろうとせず、何もしないで済まそうとするなら、その先のキャリアの見通しも暗くなります。

大学生活の特にコロナ禍では、横のつながりを中心に友人関係が築かれてしまい、縦の人間関係が築きにくい状況にあります。こうした状況のなかでも、本年度はゼミナール連合会の活動を全面的に再開することができました。ゼミ長を中心とする学生有志の皆さんやゼミナール連合会の運営に関わる先生方には、たいへん感謝しております。コロナ禍での苦労話といった生の情報が得られることはたいへん貴重なことです。これからも、ゼミ連の活動を通して情報交換のバトンを後輩へつなぎながら、皆さんの交友の幅が広がることになれば幸いです。



就活ゼミナールの授業にて

オンライン特別講演会

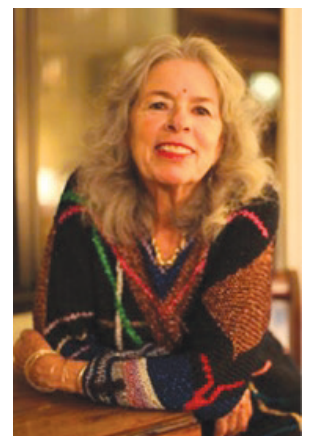
10月13日に「ホロコースト生還者の経験から平和について考えよう」という講演会が行われました。

講演者のマリオン・イングラムさんは、ドイツ人の父とユダヤ人の母の家庭に生まれました。講演会では、ホロコーストにおける体験だけでなく、現在の諸問題についても触れられていました。

イングラムさんが生まれる2ヶ月前に、ドイツではナチスによるニュルンベルク法が制定され、後にはユダヤ人の大虐殺が行われるようになりました。彼女が5歳になるまでには、すでに何千人ものユダヤ人が殺害され、他国の土地も併合されていましたが、それに対して声を上げる国はありませんでした。そのためヒトラーは、数ヶ国を侵略し、公然と大虐殺に従事しました。大虐殺にはいくつかの収容所が導入され、イングラムさんの祖母、叔父、大叔母は強制移送された後、殺害されました。

このように、ドイツでユダヤ人に対する差別を経験したイングラムさんですが、現在のアメリカでも、移民や白人ではない人々が非難されている点について危機感を持っていらっしゃいます。過去の負の歴史を繰り返さないためにも、過去の過ちから学ばなければなりません。講演会を通して、非暴力でいかにして未来を救えるのか、私も考えていきたいと思いました。

(英語文化学科4年 荒木 希美花)



マリオン・イングラムさん